

[자료해제]

기시다 다쓰야의 <월광곡>에 대하여

이민영*

여기에 소개하는 기시다 다쓰야(岸田辰彌, 1892~1944)의 <월광곡(月光曲)>은 1929년 7월 극단 취성좌가 조선극장에서 공연한 가극 <월광곡>의 모본(母本)이 되는 작품이다.

이 작품은 다카라즈카소녀가극단(宝塚少女歌劇團)이 발행한 『소녀가극 각본집(少女歌劇脚本集)』(1923)에 수록되어 있으며, 한큐문화재단(阪急文化財団) 산하의 이케다문고(池田文庫)에 소장되어 있다.¹⁾ 다카라즈카소녀가극단은 기관지 『가극(歌劇)』(1918년 창간)을 비롯해 여러 각본집과 악보집을 발행했는데, 이 작품이 실린 책은 그 중 기시다의 각본만 모아놓은 것으로 당시 다카라즈카에서 그의 위상을 짐작할 수 있게 해준다.

기시다 다쓰야는 일본 최초의 레뷰 <몽 파리(モン・パリ)>(1927)의 연출가로 다카라즈카의 공연이라고 하면 떠올리게 되는 대계단과 라인댄스를 최초로 입안한 사람이다. 그는 원래 신극단 도리데사(とりで社)에서 활동했던 인물로 데이코쿠게키조(帝国劇場) 가극부에서 로시(Giovanni Vittorio Rosi, 1867~1940)로부터 가창과 발레를 배웠다. 고바야시 이치조(小林一三, 1873~1957)에 의해 다카라즈카로 영입된 기시다가 발레를 다카라즈카에 적용할 수 있었던 것은 이러한 경험에서 비롯된 것이다.

* 마쓰야마대학 경제학부 특임강사

1) 岸田辰彌, 『少女歌劇脚本集』, 宝塚少女歌劇團, 1923.

기시다 다쓰야의 <월광곡>은 1920년 10월 20일 다카라즈카 공회당극장(公会堂劇場)에서 초연된 후 호평에 힘입어 여러 차례 다카라즈카의 무대에 오른 작품이다. 작사, 작곡까지 기시다가 했으며, 편곡은 피아니스트 다카키 가즈오(高木和夫)가 담당했다. 당시 아버지 루마노프 역에는 다카라즈카 1기생이자 남역(藍役) 주연으로 유명한 다카미네 다에코(高峰妙子)가 맡았고, 딸 소냐 역에는 시노하라 아사지(篠原淺茅), 페트로위치 역에 다카하마 기쿠모(高濱喜久子) 등 초창기 다카라즈카의 스타들이 대거 출연했다.²⁾

<월광곡>은 극적 갈등을 최대한 배제하고 소냐와 페트로위치라는 연인의 러브 스토리를 가볍고 경쾌하게 그려낸 작품이다. 사랑을 방해하는 소냐의 아버지 루마노프의 계략이나 드미트리의 악행은 극의 핵심 갈등이지만, 경쾌한 분위기에 휩쓸려 오히려 우스꽝스럽게 그려진다. 반면, 정령들의 춤과 노래가 극 전체를 아우르며 극의 서정을 아름답게 만들어낸다. 각본을 보면 대사보다 노래를 위주로 진행되고 있으며, 무용극이라는 표기에서 짐작할 수 있듯이 춤을 중요하게 부각시키고 있다. 이 작품은 다카라즈카의 무용을 이야기할 때 가끔 거론되는 작품인데 이 작품을 통해 발레를 활용한 토댄스(toe dance)가 다카라즈카의 스타일로 확립되었기 때문이다.

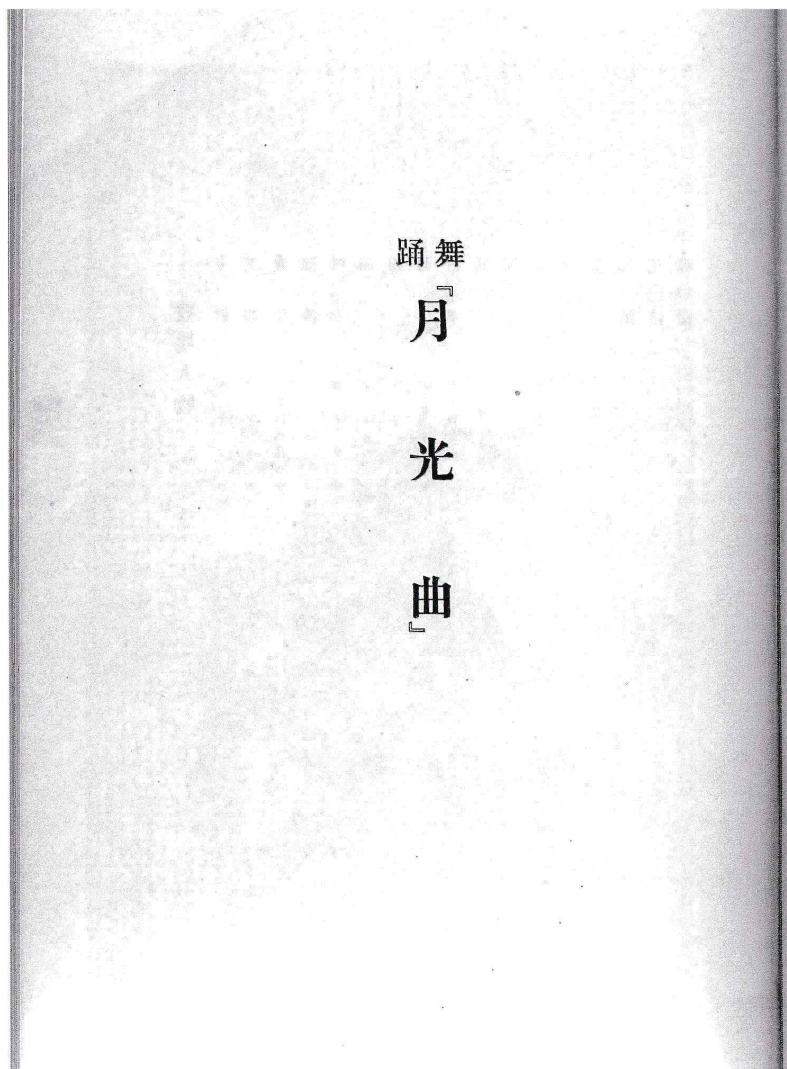
사실 <월광곡>은 기시다의 대표작도 아니고, 일본가극사에서 중요한 작품도 아니다. 그러나 이 작품은 1920년대 우리 가극, 특히 취성좌 가극의 모습과 성격 그리고 그 유입 경로를 유추할 수 있게 해준다는 점에서 눈여겨 볼 필요가 있다. 취성좌는 한국악극사의 시발점이자 1930년대 대중연극의 발원지로 꼽히는 매우 중요한 극단이지만, 공연 대본이 현전하지 않고, 공연의 구체적인 내용조차 거의 알려져 있지 않아 연구에 많은 어려움이 있어왔다.

2) 宝塚少女歌劇團 編, 『宝塚少女歌劇廿年史』, 宝塚少女歌劇團, 1933, 83면.

이러한 상황에서 취성좌의 <월광곡>은 취성좌의 가극 중 드물게 등장 인물과 줄거리를 확인할 수 있는 작품이다. 『단성사 주보』에는 취성좌의 <월광곡>에 대한 간단한 줄거리가 남아 있어 내용을 확인할 수 있는데³⁾ 기시다의 <월광곡>과 그 내용이 같다. 즉 기시다 다쓰야의 <월광곡>은 취성좌와 다카라즈카 가극의 상관관계를 입증할 수 있는 중요한 작품이며, 따라서 한국악극사 연구에 기여할 수 있는 중요한 자료라 할 수 있다. 또한 우리 대중극 양식의 기원과 유입 과정에 대한 중요한 논점을 제공한다는 점에서도 이 작품에 관심을 가져볼 필요가 있을 것이다.

3) 대한민국역사박물관 편, 「#042 단성사 주보 324호」, 『자료로 보는 일제강점기 극장문화』, 대한민국역사박물관, 2020, 78면.

무용극 <월광곡>



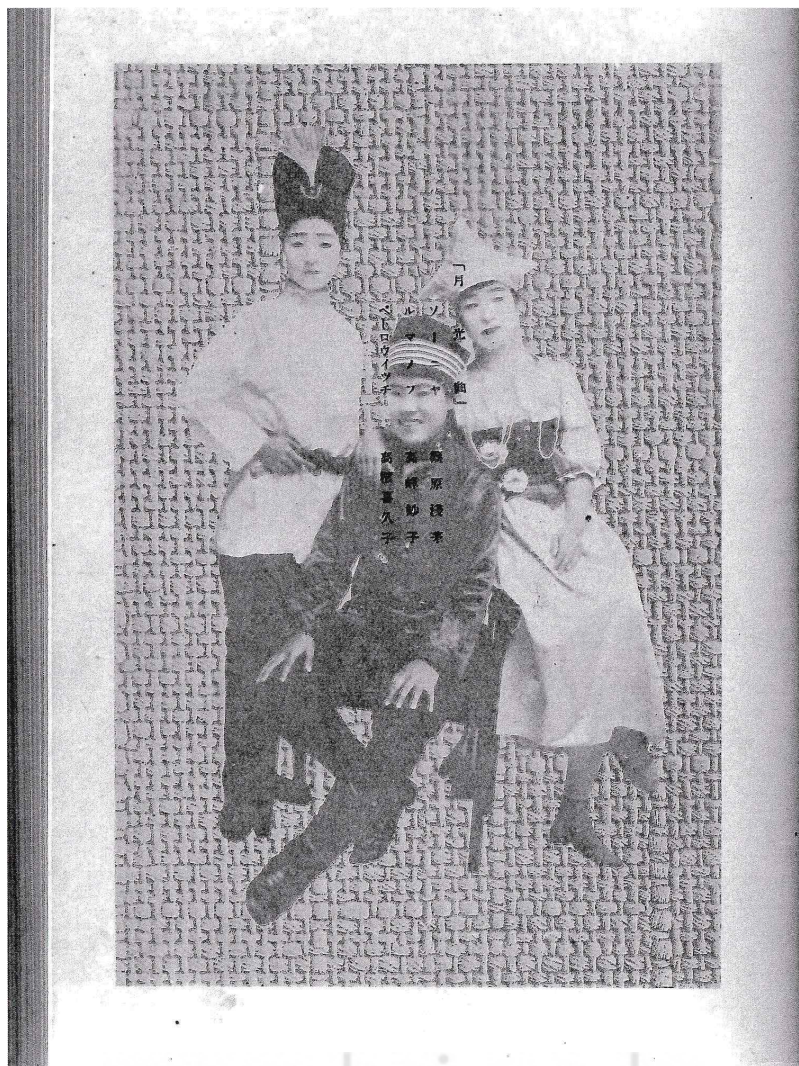
踊舞

月

光

曲

老 爺	其 娘	青 年	惡 漢	村の 少女	同	同	同	村の 少年	同	同	同	月	星	彗 星	花の 精	蝶の 精
ル マ ノ フ	ソ ー ニ ヤ	ベ ト ロ ウ イ ツ チ	ド ミ ト リ イ	カ ー チ ヤ	サ ー シ ヤ	タ ー チ ヤ	ナ タ ー シ ヤ	ド ウ ニ ヤ	ビ ョ ー ル	イ プ ン	セ ー メ ン					



月及星
合唱

『面白やく』

田舎の風景、下手に、大なる農家あり、他は一面に秋の花咲き亂れ、月、及星輝いて居る
蝶の精、花に戯れて居る舞踏にて幕開く。

美しの月の夜や

天より見れば人の世は

いと美しく輝きぬ

此の世の運命知らぬ人々

月光曲

八五

月光曲

ハタ

泣きつ笑ひつ暮すおかしさ
人の世の淺間しき』

(村の子供登場)

村の子
供合唱

『皆さん一緒に手を取つて
唄ひつ舞ひつ遊びませふ

今宵の月は美はしく

私を見ては笑ひます

今宵の星は可愛らしく

私を見ては唄ひます』

ドウニヤ「さあ皆、かうして月は輝いて居るし、風は涼しいし何かして遊ばうよ。」

イヴン「さうだな、何をして遊ばうかな、うむ、ベースボールをしようか。」

ビョートル「チエツ!! ベースボールなんか駄目だよ、こんなに暗くつちや出来ないよ、それより花火

がいよ。」

セーメン 「賛成々々。」

サーシャ 「姜は女だからベースボールや花火は嫌よ、モット、おもしろい事をしませうよ。」

ターチャ 「それじゃ、鞠について遊びませうよ。」

イヴン 「つまらねえな、だから女の子は嫌だつてんだ。」

セーメン 「君！縄飛びをしようよ。」

ビョートル 「いやだ。花火だい、花火だい。」

イヴン 「ベース、ボールだい。」

ドウニヤ 「馬鹿だな、もうよせよ、それより皆で一緒に遊べるものにしようよ、可愛想だから女の子も入れてやれよ。」

カーチャ 「それちや皆で、隠れん坊をしませうよ、月夜の晩は隠れん坊が一番よくつてよ。」

一同 「うむ、それがいい。」

合唱 「それが好い」

月光曲

八七

月光曲

久

皆打集ひて隠れん坊

誰が始めの鬼さんか

チャンケンをして極めませう

チャンケンボン

チャンケンボン

ドウニヤ「やア、カーチャの鬼だ。」

ビョー「目を隠せ。」

イブン「見ちゃいけないぜ。」

セーメン「三十勘定したら目を開いて探すんだぜ。」

ターチャ「さあ、皆隠れろ。」

一同「隠れろ。」

カーチャ「さあ、よくつて、目を開けてよ。」

ナター
シャ 「まだよ／＼。」

セーメン 「まだ／＼い／＼、俺が知らせるまで駄目だい。」

(一同、ベンチの下、木の影、家の後の方等に隠れる)

一同 「もうい／＼よつたら、い／＼よう、い／＼よ。」

カーチャ 「(目を開き)あら!!何處へ隠れたんだらう、こんな時にお月様がモット明るく照らして下されば、好いになあ。」

月獨唱 『愛らしのカタリナ

お前の探すドウニヤは

ベンチの下に隠れて居るよ

木立の影にはサーシャが

イヴンにセーメン箱の中』

カーチャ
ヤ獨唱 『あら如何したのか

月光曲

月光曲

誰か妾に教へてくれる

こりや面白い』

カーチャ「そら此處にドウニヤがいる。」

(耳を引張つて引き出す)

ドウニヤ「痛たいく、放して呉れよ、到々つかまつちやつた。」

カーチャ「そうらサーシヤは此處に居る。」

サーシヤ「折角好い所へ隠れて居たのになあ。」

星の一
獨唱 『ターチャは、家の影』

(カーチャ、ターチャを見つける)

星の二
獨唱 『ビョートルは花の影』

(ビョートルを見附ける)

星の三
獨唱 『箱の中にも二人居る』

(イヴン、セーメン、出て来る)

星の四
獨唱 『早く歸らないと、老爺が出て来るよ』

ターチャ 「カーチャは偉いな、直ぐ皆見附けるんだもの。」

カーチャ 「さうよ、妾には、あの真丸なお月様がついて居て下さるんですもの、さあ今度は皆であ

のお月様の爲めに、もう一度踊りませう。」

月、星及花の精合唱 此の唄にて子供達踊る

『愛らしの幼な兒よ

仲よく遊び疲れたら

家へ歸つて休みなさい

あしたの朝は早く起き

學校さしておいでなさい』

(家の内よりルマノフ登場)

ルマノフ 「こら、又騒いで居るな、仕樣のない餓鬼共だ、早く失せやがれ、愚圖くして居るさ、

天秤棒で、ドヤスぞ。」

月光曲

月光曲

九二

イワン 「やつ!來やがつた。」

セーメン 「意地惡老爺。」

ドウニヤ 「此處まで來て見ろ。」

ルマノフ 「何だこ。」

ビョー トル 「捕まる者なら捕へて見ろ。」

ルマノフ 「此野郎奴。」

(こ追ひかける、一同逃げ入る)

ルマノフ 「到底も、やりきれない、かう朝から晩まではやし立てられちや、命がつゝかねや、切角今夜は、いゝ月を眺めてゆつくり一盃やらうと思へば、此の始末だ。あゝ、老婆には先へ逝かれるし、只一人の娘は俺の云ふ事はきかねで、ほんく當り散すし、さうく娘さ云へば家のソーニヤの奴は、此頃少し變だよ。さうも、あの、ペトロウイツチの奴が怪しいぞ、此間も青い顔して、ひよろく俺の所へやつて來て、ソーニヤと結婚したい、嫁に呉れさまるで三日も飯を食はない様な聲で、ぶつゝ云つてやつた、面倒くさいから、

いけねわ、お前みた様な、意氣地なしには俺の娘はやれねわ、ミ怒鳴つてやつたら幽霊見
 たいにフラ／＼ミ何處へか行つて終やがった。誰があんな、へちまに大事な娘をやるもの
 か、あ、かうなるミ酒より外に俺を慰めて呉れる者はないさ、あ、酒だ／＼、ざれ向ふの
 酒場へ行つて來やうか。」

フルマノ
 獨唱

『酒だ、酒だ、甘い酒

淋しい、惨めな、此年寄の

心を、もやすは、赤い酒

酒だ、酒だ、甘い酒

向ふの酒場にや

可愛い奴が

俺等の行くのを待て居る』

(退場)

月光曲

月光曲

月獨唱

『人の世は淺ましや

戀の炎に身をこがし

毒の酒に身をひたす』

花の精
一獨唱

『覺めよ』

ソニーヤよ』

花の精
二獨唱

『唄ひて呼べよ戀人を』

(ソニーヤ窓より現はれ)

ソニーヤ
一獨唱

『今宵の月影

さやかに野邊を照す

つま戀ふ虫の音

淋しくも哀れなり

遙かに聞ゆるこそ

君の歌聲ならめ

我も亦唄ひて

君にぞ答へまいらん

あゝ

戀知りそめにし

我身の苦しさを

御空に輝ける

星影たよりて

とく來ませ』

ソーニャ「ペトロウィッチさんはどうしたんだろ、早く来て下さるさ好いのね、それにしても心配な事には、お父様があゝ云ふ御考へでは全く心配だわ、全くさう云へば、ペトロウィッチさんは少し、弱虫過ぎるわ、あつ、おいでなすつた、まあ嬉しい、おや、お父様だわ。」

月光曲

九五

月光曲

(ルマノフ登場)

ルマノフ 「ソーニヤ、何をそんな所から覗いて居るんだ、早く窓を閉めてお休みよ、近頃悪い奴が出没するからな、い、か、外へ出るじやないよ、油断はならないよ、判つたか。」

ソーニヤ 「ね、判つてるわよ、お父さん、早く酒場へいらつしやつて、そして早くお歸りなさい。」
ルマノフ 「お、よし／＼行つて来るぞ。」

(ルマノフ退場)

ソーニヤ 「まあ、つまらなかつた。ペトロウイッチさんかと思つたら、お父さんなんですもの。」

(ペトロウイッチ唄ひながら登場)

ペトロウイッチ 獨唱

『我君慕ひて

此處まで尋ね來れば

月影輝き

樂しくも面はゆし

我手を取り給ひて

君の御心づくし

共に秘めたる心を

楽しく語りあかさん

あゝ』

ソーニ
ヤ獨唱

『嬉しや我君

ようこそ尋ね給ひぬ

いざや語らんこのあつき

我胸の想ひをば』

ペトロウイツチ、ソーニヤ合唱

『嬉しや我君

手を取りかはすこそ

月光曲

七

月光曲

九八

いざや語らん、このあつき

我胸の想ひをば』

ベトロウ
イツチ

「ソーニヤさん、今晩は、何故そんな處から、覗いて居るんです、今夜は美しい月ですぜ、そこらを散歩しませうよ。」

ソーニヤ

「妾、外へ出られないの、お父様が、留守番をして居ろつて仰有るの。」

ベトロウ
イツチ

「それは困りましたね、だが一體お父様は、何處へおいでなさつたの。」

ソーニヤ

「酒場よ、妾を一人ほつちにして置いて、自分は毎晩お酒を飲みに出掛けちゃうのよ。」

ベトロウ
イツチ

「それは、怪しからんが、その方が都合がいゝじやありませんか、お父様がそんな事をな

さるんなら、僕等も大に規則を破つて散歩しませうよ、かまうものですか、好い月ですよ。」

ソーニヤ

「わゝ、今行くわ、叱られたつてかまわないわ、あんなお父さんちつとも恐くないわ。」

(と室内に入る)

ベトロウイツチ獨唱

『我愛らしい戀人と』

手をとり／＼の語らいや

そいろ歩きの樂しさを

月はかすかにほゝ笑みぬ』

(ソーニヤ家より出て來り)

ソーニヤ
獨唱

『樂しき今宵

我君と

彼方の森や、草原や

さゝやく小川の

はとりにて、語り明さん

月の夜』

(二人退場)

月獨唱

『父の言葉も命令も

月光曲

月光曲

戀に、しいたる耳には入らず』

星(一)
合唱

『我が家にせまる

出来事知らず

不在にすること

おかしけれ』

星(二)
合唱

『怪しの男、しづくど

忍び寄ること

面白し』

(悪漢ドミトリイ登場)

ドミトリ
イ獨唱

『金は一文もない

物價は高い

あしたの御米さへ

買ふ事出来ぬ

とてもやりきれない

あゝ、どうしやう

首をばくろふか

夜逃げをしようか』

月獨唱

『ドミトリイよ

目を上げて見よ

お前の傍には、お金持ちの

ルマノフの家があるぞ』

ドミ
トリイ

「こりや有難い、お金持のルマノフの家だな、さうだ、お嬢様にお願ひして、何か有附き
たい物だな、今晚は、わゝ、今晚は、返事がないぞ、今夜はわゝ、今晚は、だれも居ませんか、
居ないさちよつゝ商賣替をしますよ、占めた、誰れも居ないぞ。」

月 光 曲

101

月光曲

(ドミトリイ、ルマノフの家を伺ふ)

月獨唱

『ドミトリイ

悪い事をするな

悪い事は神が許さぬぞ

ルマノフが歸つて来るぞ

ドミトリイ』

(ルマノフ登場、ドミトリイを見て驚き)

ルマノフ 「やア泥棒だく。」

ドミトリイ 「静かにしろ、俺は大悪漢のドミトリイ様だぞ。」

ルマノフ 「あゝ命ばかりはお助け下さい、その代りお金でも、衣類でも、なんでも家にありつたけ
のものは差上げませんからござうぞ。」

ドミトリイ 「何だこ。」

ルマノフ 「あゝ、間違へた、命は皆差上げますから、お金ばかりはお助けく。」

ドミト 「ふざけた事を云ふな。」

ルマノフ 「助けて呉れく。」

(ベトロウイッチ、及ソーニヤ登場、ベトロウイッチ、ドミトリイを捕へて)

ベトロウイッチ 「こゝら馬鹿な真似をするな。」

ドミト 「何卒御許し下さいませ、悪い事はいたしません。」

ベトロウイッチ 「悪い事仕ないとは何事だ、警察へ引き渡すから、左様思へ。」

ドミト 「御免下さいませ、もう決して致しません、今夜だけは御許し下さい。」

ルマノフ 「ベトロウイッチさん、こんなに謝まつて居るんだから、今夜は許してやりませう、それ

に見る處、真からの悪黨でもなさうです。」

ベトロウイッチ 「貴方が左様仰有るなら許してやりませう、早く行け、二度と再び此の村へやつて来るこ

此度は承知しないぞ。」

ドミト 「有難う御座います、もう決して此村へは参りません、さうも有難う御座います。」

月光曲

1101

月光曲

(ドミトリイ退場) (村の子供達登場)

ルマノフ「やあ、實に君は偉い男だ、僕の命の親だ、僕は君がこんなに強い人とは思はなかつたよ。此の御禮には、何でも君の望むものを君に上げませう。」

ベトロウ「有難う、それじやソーニヤさんを僕に下さい。」

ルマノフ「あゝいゝごも、然し斯う云ふ事は本人の心を聽いて見ないごなあ、さうだねソーニヤ。」

ソーニヤ「お父様の仰有る通りに致しますわ。」

ルマノフ「ハ、ハ、始めて私の云ふ事を聞いたな。」

カーチャ「ソーニヤさんお目出度う。」

サーシヤ「ベトロウイッチさんお目出度う。」

ドウニヤ「ルマノフ家萬歲。」

一同「萬歲。」

ルマノフ「さあ皆家へ這入つて、お婚禮の御馳走だ、さあ皆来い。」

(一同ルマノフの家に入る)

月獨唱

『目出度しや

二人の若者、契りを結ぶ

今宵は樂し

目出度しや』

花の精
一獨唱

『我等も樂し

共々に月の世界に

昇り行き』

花の精
二獨唱

『二人のことほぎ

踊りて遊ばん』

月、星、花
の精合唱

『いざ共に

月の世界へ

昇り行かん』

月光曲

101

